『翰林五鳳集』について——近世初期漢文学管見——（二）

On "Kanringohosyū" (2)

蔭木英雄

前巻では『翰林五鳳集』（以下『五鳳集』と略記）の成立の事情を考えて、

『五鳳集』は、後陽成上皇の御遺志を継いだ後水尾天皇が、天下を保んじ社稷を保つ為、また下を化し風俗を移す為に、舟橋秀賢・土御門泰重・剛外令柔・集雲守藤ら百僚に命じて、文字を離れ別伝を立てる捷径である禅詩、具体的には、中古以来今人に至るまでの五山の詩を采輯せしめた、五山文学唯一の勅撰詩集である。

という仮説を提示した。そして撰者の一人として舟橋秀賢を推定して、彼の文学的業績を紹介しておいた。今回はひき続いて、他の撰者候補を考えてゆきたい。

土御門泰重

安倍氏は晴明から土御門氏を名乗る。土御門泰重が『五鳳集』撰者であるという直接的証拠は何一つない。ただ本稿執筆第二の目的〝近世初期漢文学概観〟を兼ねて、状況証拠を述べてみたいのである。

『続群書類従』所収の安倍氏系図別本は、土御門泰重の祖父有脩までしか記載していない。この系図の断絶は、有脩の子の久脩が関白豊臣秀次の為に陰陽道の奉仕をしたので、豊臣秀吉の怒りを買って尾張に流され、陰陽頭が闕職になった事と関連があると、筆者は推察している。『公卿補任』によって略家系を示し、あわせて土御門泰重の官歴を見てみる。

有宣——有春——有脩——久脩——泰重

羽柴秀吉が太政大臣となり、豊臣姓を名乗った天正十四年（一五八

六）の年、正月八日誕生なので、父久脩が尾張に流される前に泰重は生れ、慶長八年三月一日、元服して蔵人となった。

於紫宸殿被行天曹地府祭。安倍久脩朝臣勤仕之。〈『両局注進記』慶長十六・五・五〉

とあるので、久脩は秀吉の死後帰京して朝廷に勤仕している。泰重も元和改元の日時の勘文を調え〈慶長二十・五・廿九〉、徳川家康の病気平癒祈願を内侍所で行う日時を勘案し〈元和二・二・九〉、一条邸立門の日時の相談にあずかる〈元和四・十一・十七〉など、陰陽家として活動している。そして、元和三年正月五日に正五位下、寛永三年十一月十九日に左兵衛佐となり、同廿一年十二月十二日には左兵衛督、慶安二年四月廿一日従二位に叙せられ、寛文元年八月十九日、七十六歳で薨じた。元和元年から寛永十九年までの『土御門泰重卿記』（以下『泰重記』と略記）を遺している。

土御門泰重が後陽成文壇で活躍するのは、廿六歳の慶長十六年ごろからで、鳳城聯句が盛んに作られている時期からに当る。慶長十六年五月四日の院御所聯句（五十韻）会の出席者を、句数の多い順に並べてみる。

後陽成上皇17　古澗慈稽14　剛外令柔13　友竹紹益12　集雲守藤12　有雅元賡10　英岳景洪10　舟橋秀賢8　菊丸2　土御門泰重2

五山文学僧が句数の約八割を占めており、泰重は最少の二句であった。彼の句の前後を読んで『鳳城聯句集』の作風を瞥見しておく。

（前略）

5 霞奪暮山紫 元賡　（霞は暮れなずむ山の紫色を見えなくし）

6 雪添寒月光 御製　（雪は冬の月光をあび寒々としている）

7 景従江上湧 泰重　（日は大川の上に湧き出るように昇り）

8 峯自霧間彰 集雲　（峰が霧の切れめからくっきり現われる）

（中略）

47 鶴按霓裳舞 御製　（鶴は玄宗作の霓裳羽衣の曲を舞い）

48 麟呈国柄祥 秀賢　（麒麟は国政のさいわいを表わす）

49 風高卑泰華 菊丸　（風儀は高くて泰山華山でも見おろし）

50 朝運等虞唐 泰重　（朝運は堯舜の世とまったく同じ）

○5暮山紫＝王勃「滕王閣序」"潦水尽而寒潭清　煙光凝而暮山紫"

○48麟＝聖人が出て王道が行われると麒麟が現れるという。　○49卑泰華＝『漢書』郊祀志"東泰山卑小不称其声"。なお、泰重と菊（華）丸の名をもじっている。　○50虞唐＝堯は陶唐氏。舜は有虞氏で名は重華なので前句の泰華につく。

47、48、49、50の最後のめでたい四句が公家の作ばかりなのは偶然ではあるまい。もう一つ、慶長十八年正月廿二日の仙洞聯句会を見てみよう。出席者は前回より三人多く、

後陽成上皇13　集雲守藤11　玉峰光璘11　玄英寿洪11　英岳景洪10　古澗慈稽10　友竹紹益9　智仁親王8　有雅元賡7　山科言緒3　土御門泰重3　有節瑞保2　舟橋秀賢2

やはり五山僧の句が圧倒的に多い。今回は泰重が大章句（発句と入

韻）を作っている。

1 鶯向風神唱 泰重 （鶯は春風に向ってさえずり）
2 寿梅請禱無 泰重 （梅を祝って祈ることがなく、みな健康）
3 鳳知天聖至 八条宮 （鳳は聖人が世に出るのを知って飛来し）
4 停竹現祥乎 八条宮 （竹にとまっているが瑞祥を現すのだろうか）

（中略）

15 秋心礁愜素 友竹 （秋の愁いは白絹を砧打つ恐れの心で）
16 閨夢枕欹孤 泰重 （ねやの夢から目ざめ孤り枕から頭を上げる）

（後略）

○1風神＝漢語なら人品とか文字の気韻の意。ここは和語の風の神（漢語では風伯という）の意に用いているのだろう。 ○2請禱＝『論語』述而〝子疾病、子路請禱〟。 ○3鳳＝梧桐に棲み竹の実を食う。 ○15礁＝音はチン。砧と同じ。きぬた。杜甫「九日」〝秋砧醒却聞〟。

泰重の第二句の寿梅の意味がよくわからない。筆者の読解力不足もあるが、聯句作者の力量にも問題があるようだ。凝縮性、典拠性、構成美、含蓄性、音楽性などが秀句の条件だが、泰重らの句はそれらを欠く。友竹の句は李白「子夜呉歌」の〝万戸擣衣声（つまり砧の音）秋風吹不尽〟の愁婦の心をもとにしているのだろうが、[1] 五字の構成が整っていない。中国詩の世界よりも、

千たびうつ礁の音に夢さめて物おもふ袖の露ぞくだくる（新古今集　式子内親王）

という和歌と同趣の句で、泰重の第十六句も、

独りねの夜さむになれる月見れば時しもあれや衣うつ声（新勅撰集　後京極前太政大臣）

窓あけて山のは見ゆる閨の内に枕そばだて月を待つかな（玉葉集　信実朝臣）

など中世歌人の延長線上の作である。筆者はいちがいに和臭を排するものではないが、和語的な漢語が、句の整斉美を損っていることは否めない。聯句会と共に和漢聯句会が盛行していた時代的産物として無理からぬことだが、古今東西にわたって鑑賞に堪え得る文芸的作品とは言えないだろう。土御門泰重は山科言緒と共に上皇の『伊勢物語』講を発起して聴聞し〈『言緒卿記』慶長十九・四・九〉、さらに『源氏物語』講〈『泰重記』元和元・八・十六〉、『詠歌大概』講〈『中院通村日記』『泰重記』元和二・三・十八〉を聴いたりする日々を送っているので、前述の如き弊に陥るのは当然の成り行きであった。

泰重は単に後陽成上皇の日本古典講義を拝聴し、聯句の座に列するだけでなく、直接に上皇の文学的指導を受けることが多かった。『泰重記』から摘記すると、

四月二日の漢和の下稽古と仰せられ、漢和百匂を御興行。漢は予（泰重）、山科言緒、清寿、太上天皇なり〈元和元・三・廿七〉。予、言緒、清寿、上皇の四吟点取り御聯句。点は藤長老（集雲守藤）なり〈同年・九・四〉。

御点取聯句四吟。上皇と言緒と囲棋二盤成さる〈同年・十・八〉。[2]

点の第一は太上天皇、次に予、次に清寿、次に山科なり（中略）惣じて太上天皇に次では予なり〈同年・十・十九〉。

昨日の聯句再々巡、今朝仙洞へ持参し候。予の心次第書き付て進上申すべき由仰せなり〈元和三・正・廿一〉。

上皇と共に漢和聯句会の内々の下稽古をしたり、山科言緒、清寿を交えて点取四吟に興じたりして、「上皇の次に秀れているのは自分だ」と自負している。文字通り君臣唱和の間柄であった。

愚詠十首、仙洞へ御意を得候。御詞を加えて下され候。毎度悉なき事なり。愚詠のわきには御直しこれ無く、別紙に批語よろず仰せ聞かせられ候〈元和三・三・二〉。

院御所様に予の歌十首上り申し候。即ち御直し成され候て下されれ候。毎度有難き事に候〈同年・四・四〉。

と、泰重は和歌の添削や批評を上皇から頂戴している。後陽成上皇が『五鳳集』撰集を企図されるに際し、漢句の常連で寵臣である土御門泰重を、撰者の一人に入れられた可能性は極めて大きいと言える。上皇が亡くなられたあと、

一条殿懐旧聯句御座候。殊更予大章句を申し上げて候。仙洞の御弔の心に候。

仙去空留洞　（上皇は仙人となってみまかり給い、空しく御所だけが残る。）[3]

凍鴛慕跡啼　（冬の鴛の如き私は、あとをお慕いして泣く）

一条殿は御句を予に談合成され候〈元和四・十二・二〉。

と大章句（発句と入韻）を作って、後陽成上皇を追慕する泰重であった。

次に、父院の御遺志をついで『五鳳集』を完成させた（と筆者が仮定する）後水尾天皇と土御門泰重との関係に目を向けてみる。泰重は仙洞聯句会と並行して禁中の聯句会に仕候し、上皇崩御の後は天皇の句会に、上皇と同様に近侍している。『言緒卿記』によると、慶長十八・十一・廿五や同十九・二・廿六日の禁中和漢聯句会には執筆を勤め、後者の会には中院通村（廿七歳）柳原業光（廿歳）山科言緒（廿六歳）土御門泰重（廿九歳）が漢衆であったが、『時慶卿記』に、

禁中御会。和漢若衆各伺候（傍点筆者）。

とあり、十九歳の後水尾天皇の詩壇の人々を、六十三歳の西洞院時慶は「若衆」と呼んでいる。前号（相愛大学研究論集第四巻。十二頁）でも述べたが、もう少し元和四年の句会の風景を点描してみよう。

九月廿六日。夜予参候すれば御前に召さる。御章句は大章句なり。遊ばさる。予の対仕るべく候由勅命なり。其の夜は成し能わず。私宅より上り申し候。御点取りの由仰せなり。御句は、

気候不斉雪　（気候不順で雪が降るので）

折花忽報春　（花を折って春の到来を知らせる）

天皇の大章句に泰重はその場で対句を作ることが出来ず、自邸で考えてから奉ったのであった。また、

十一月廿日。禁中より漢和一巡下され候。則ち八句目なり。書き付けて上り申し候。指合御座候ゆえ、宸筆を以て御書き付け

下され候。中務と遊ばされ候。則ち頂戴す。有難き事なり。

「後陽成上皇の次に秀れているのは自分だ」と自負していた泰重も、即座に対句が作れなかったり、漢和法式に合わなかったりしている。

土御門泰重は禁中・仙洞のみならず、多くの公家邸や禅院での詩聯会・和漢聯句会に出席している。例えば、

白河伯少将顕成邸和漢点取会〈慶長十九・四・三〉。南禅寺月次詩聯会〈元和二・正・廿九。同年四・十六。十一・二〉。近衛信尋邸漢和聯句会〈元和四・十・十〉。烏丸光賢邸詩歌会〈元和四・十・廿九〉。[4]相国寺漢和聯句会。[5]三宮和漢聯句会隠密会〈元和六・四・十三〉。竹内刑部少輔孝治邸和漢聯句会〈元和七・五・十四〉。綾小路高有邸和漢聯句会〈元和七・七・廿〉。

等である。就中一条邸に頻繁に訪れている。

一条殿漢和御興行前に内稽古成されるべく候間、予に「章句申上げ候へ」と仰せられ候故、〝華院綉成筝〟と書き付け進上申し候〈元和二・五・十一〉。

と五月廿八日に催される漢和の稽古に参加[6]し、

一条殿（兼遐）聯句御会に伺公致し候（中略）。皆初心の衆なり。予と桂山の両人、初心の衆を指南申し候〈元和四・七・五〉。

一条殿御句を予に御談合。常の事なり。〈元和七・六・十一〉。

後水尾天皇の第九宮として生れた兼遐は、一条内基の養嗣子となり、元和七年は十七歳で、三十六歳の泰重が常に聯句の指導をしていた。

一条殿にて『錦綉段』を読み申し候〈元和五・二・廿〉。

と、五山僧天隠龍沢撰の『錦繡段』を講じている。さらに、

御聯句御会有り。未刻に相終る。予手前、橋本、花山院宰相中将の三人の句を代り仕てまいらせ候。予事の外草臥（くたびれ）しなり〈元和七・七・廿一〉。

日の出より以前に早参。今日の御連衆は廿人なり（中略）。西坊城、平松等は予が行き廻り、句を合力申し候。花山院宰相殿も御頼み候故、助言申し候（中略）。予事の外草臥、早々に退出申し候〈元和七・十・六〉。

というように、一条兼遐だけでなく橋本実村、花山院定好、西坊城遂長、平村時興らの句作も助けているのである。土御門泰重が後水尾詩壇の公家衆の指導的地位にあったことが明らかであり、その泰重の句をも後水尾天皇は宸筆で御訂正になって、詩壇の頂点に位置しておられたのである。

山科言緒

「丑刻、山科宰相言緒（ときお）卿卒す。朋友の故一入（ひとしお）周章せり（取り乱した）」と土御門泰重が記す山科言緒も、『五鳳集』撰者に擬してもおかしくはない人物である。山科家は冷泉から分れ、代々の当主は楽所別当に補せられ管絃を家職とする家柄であり、また、内蔵頭就任とともに、朝廷御服進納を重要な任務としており、御服所支配は室町幕府によって安堵されて来た。言緒も、

院御所様へ年々の如く御烏帽子を進上致す。「もろひたひ」にて候。高倉右衛門佐（永慶）仙洞に「かたひたひ」の由申し上げら

る〈慶長十九・十二・廿七〉。

と『言緒卿記』に記しており、徳川家康からも正月著用衣服の調整を依頼されている〈元和元・九・十六〉。家系は、

言継――言経――言緒――言総

冷泉為益 ┬ 女 ＝ 為満

で、二字名の下は代々糸へんである。

山科言緒は天正五年二月廿一日生れなので、土御門泰重より九歳上である。父の言経はこの年の正月五日、権中納言に任ぜられて、天正五年は山科家にめでたい春を齎した。しかし天正十三年六月廿四日、言経は正親町天皇の勅勘を被り、夫人の弟の冷泉為満らと共に出京し、堺・大阪で町医として貧窮生活を送った。西梅津の知行地に関し、天皇の御不興をかったのが原因らしい。(7) もちろん九歳の言緒も父に従い、慶長三年十一月に赦されるまで苦労を重ねた。

慶長四年十二月十五日、内蔵頭に任ぜられたあとは、山科言緒の官位は順調に進み、元和三年正月五日従三位、元和五年七月十三日参議となり、六年二月廿五日、四十四歳の壮年で薨じた。従って彼の公家世界での活躍は二十二年間だった。

（後陽成天皇）番所へ出御、御聯句これ有り。執筆は言緒なり〈慶長九・正・廿九〉。

南禅寺語心院（梅印元冲）は（舟橋秀賢邸に）来候せず。漢衆無きにより俄かに申し来る間同心し了んぬ（中略）。執筆言緒〈慶長九・十・廿九〉。

と『言経卿記』にあるように、彼は初めの頃は父に伴なわれて聯句の席に列（つらな）った。父言経は北野社法楽に和漢聯句独吟を奉納するほどの文人であった。

慶長十六年二月廿七日に言経が薨じ、後水尾天皇が同じ年の三月廿七日に践祚されてから、山科言緒は一そう後陽成院に親近して仕えた。ただ『五鳳集』の成る三年前に薨じたので、最後まで撰集の任を果たすことは不可能だったが、筆者は彼を『五鳳集』撰者の一人と推定するのである。

以上、舟橋秀賢、土御門泰重、山科言緒の三人を『五鳳集』を編んだ〝百僚〟の候補者として述べてみたが、このほかにも中院通村や柳原業光等を考察しなければならないだろう。しかし、彼等は漢文学史料に登場する回数は少く、本稿の叙述もマンネリに陥るので割愛することにする。

五山僧の中から『五鳳集』撰者を推定するとなると、候補者が多くてまことに難かしい。序・跋の作者の以心崇伝と剛外令柔、『古文真宝』を講じた月渓聖澄、屢々仙洞聯句に点を付け『仙洞三千句序』を書いた集雲守藤、『錦繡段』を進講し鳳城聯句会常連であった梅印元冲、智仁親王に親しく仕えた昕叔顕晫、舟橋秀賢の弟で聯句会常連の有雅元賡、その他、古澗慈稽、友竹紹益、玉峰光璘、有節瑞保、英岳景洪、そして『五鳳集』を清書した三十一人の僧達など、誰を

撰者に擬してもおかしくはないのである。

末期の五山文学

ここでしばらく、桃山時代以降の五山文学末期の状況に目を向けてみたい。『鹿苑日録』〈文禄元・十二・廿七〉に次のような文章がある。

殿下（豊臣秀次）より召され、即ち御前に侍すれば、台命に曰く、「五岳の文字凋落し嘆き有り。[8] 再び旧観に復し、叢社を春台（盛んな時代）に回さるるを望む云々」と。抵頭して曰く、「尤も可なり」。殿下曰く、「月次聯并に詩会を鹿苑院に於て一会、東福南昌院に於て一会、両寺隔月に相い勤むべし。」

と、関白豊臣秀次は五山文学を再興する為に、相国寺鹿苑院と東福寺南昌院で隔月に月次詩聯会を開催すべき事を、鹿苑僧録の有節瑞保に命じている。そして経済的援助として、一会につき五石を支給する事を定めている。さらに関白秀次は、

累年五岳の衆は詩文を学ばず、徒らに光陰を送るは曲事なり。以往に於ては、学問勤めし衆をば小寺領より不学の衆の大寺領に引き替え遣すべし。

と命じているのである。そこで有節和尚は前田玄以邸に趣いて評議した結果、台命を五ヶ条にまとめた。[9] 立身出世と財政的援助を餌に再興される文学の質が、どういう方向を辿るかは目に見えており、悲観的にならざるを得ない。[10]

豊臣秀頼の大阪城が陥落した年、昕叔顕晫は次のように『鹿苑日録』に記している。

斎後登城すれば五岳法度を仰せ出さる。七ヶ条これ在り。その中に、「蔭涼・鹿苑は前代の規範なり。毀破し了んぬ云々」と。時なる哉、命なる哉。無徳の禿漢、此の末運に際し住院の任（鹿苑院主）に当る。慚愧々々〈元和元・七・廿五〉。

と鹿苑僧録・蔭涼職の終焉を嘆いた翌日には、

南禅寺金地院に到り、昨日相公より碩学料を賜わりし礼を伸ぶ。碩学衆一列に銀子二十枚を出呈す。吁野き哉、叢林規矩の衰廃、典□（章カ）地に委つ。嘆くべし嘆くべし。

昕叔和尚の嘆きは、鹿苑院主即ち鹿苑僧録の自分が、金地院主以心崇伝の権力の前に屈しなければならない屈辱、碩学科（学問奨励金）を受けねばならない五山文学の衰退にあったのである。もう少し元和元年前後の五山文学事情を列記しておく。

慶長十九・五・十一　徳川秀忠は五山僧を召し、即席に詩を賦せしむ。

同　八・十四　江戸幕府は林羅山及び五山僧を集めて「方広寺鐘銘」を批判せしむ。

同　九・某　後陽成上皇は「仙洞三千句序」を集雲守藤に作らしむ。

同　十・十四　徳川家康は以心崇伝及び林羅山に命じて、五山僧十員に古記録を謄写せしむ。

元和元・三・九　徳川家康は五山の学僧を試文す。

同　七・廿五　幕府は五山十刹諸山諸法度を発布。
同　八・三　古澗慈稽は「仙洞三千句跋」を携えて有節瑞保を訪れる。
同　十・十四　方広寺鐘銘事件により文英清韓捕わる。
同　十一・四　禁中に在った文英清韓所有の『四海入海』『帳中香』等の典籍を幕府が押収。

これらの推移を見るとき、五山文学は一面では宮廷・公家と密接に交わり、他面、幕府の管理体制の中に徐々に組みこまれていることが分る。かくて、中世文学の一である五山文学の下限を、元和元年に置いた筆者の考えは確信に近いものとなる。[11] そして、かかる趨勢であったので、後陽成・後水尾両帝は一そう五山文学を慕われて、一つの区切りとして『五鳳集』撰集を思いつかれたのではなかったか。さらに推測を広げると、管理体制からの観念的脱出として、『山林風月集』[12]が『五鳳集』と同時に編纂されたと考えられるのである。

以心崇伝

『五鳳集』序文を執筆した以心崇伝（一五六九～一六三三）は、黒衣の宰相として江戸幕府政治に深く参与した。序文の中で、

聖代祇今、征夷将軍関より起って朝に入り、嗣子相い継ぎて相印を佩び第三員に列す。共に其の後に拝す五瑞、各〻名狶を九天に展べ、徳輝を千仞に覧る。帝畿の壮んなること茲の日にしくは無し。

と徳川将軍を祝福するのは、幕政に密着する以心としては当然の文章である。

臣僧、幕府に追陪して朝忽暮開、閑暇有ること無く、因循にして日を送る。（『五鳳集』序文製作遅延の）怠慢の罪逃るる処無し。

と記すように繁忙だったので、彼を『五鳳集』撰者に擬するには些か躊躇するが、有力候補者の一人には間違いない。本稿では以心崇伝の政治活動は割愛し、先学[13]があまり触れなかった詩や聯句について略述する。

使僧曰く、「以心は来る廿日遷寮す。然れば殿下（豊臣秀次）より仰せ出さるる月次聯句（前頁上段参照）一巡これ有るべきや否や」〈『鹿苑日録』文禄二・正・二〉

と、以心崇伝は豊臣政権下の月次聯句会の列席者であった。また南禅寺帰雲院の詩会にも出ている。『慶長日件録』を繙くと、慶長十一年十一月廿八日の陽明殿下邸和漢会で、「かすみつつ橋の行衛の明渡り」の玄仲の第五句に、以心和尚は「隔江舟送迎」と付け、慶長十二年九月十八日の禁中和漢会では、広橋兼勝の第八句「村より村につづく苗代」に、「声々蛙互答」と付けている。『御陽殿上日記』〈慶長十三・五・廿八〉は、

御れんくあり。御人しゅ藤ちゃうらう（集雲守藤）、てんちゃうらう（以心崇伝）。

と記し、土御門泰重は、

御聯句御会今日興行なり。早天伺公申し候。はや伝長老伺公な

り（中略）。伝長老の章句佳なり〈元和七・八・四〉。

と書いていて、以心崇伝は後陽成・後水尾両帝や近衛信尋の聯句会によく出席しているのである。当然『五鳳集』には、巻五の「簷花細雨」をはじめ三十一首も収載されている。東福寺南昌院の月次詩聯会[14]に於ける一首を紹介する。

月夜聴鵑

桂影吹晴鵑喚名　一声彷彿聴千声　空山老樹不知暗　啼破浮雲添月明

（月光が風と共に晴れて時鳥は名をよびかわし　一声の鳴声はさながら千声を聞くようだ　人気のない山の老木は（月光に照らされて）闇を知らず　雲を破る鳴声は月明と共に心にしみる）

どの句も『新古今集』の歌を想起させる。すなわち、

起句＝卯の花の垣根ならねど郭公月の桂のかげに鳴くなり（新古今二〇〇）

承句＝時鳥一声鳴きて往ぬる夜はいかでか人のいをやすく寝る（新古今一九五）

転句＝おのが妻恋ひつつ鳴くや五月やみ神南備山の山郭公（新古今一九四）

結句＝わが心いかにせよとて郭公雲間の月の影に鳴くらむ（新古今二一〇）

今のところ、以心崇伝が新古今集を学んだ形跡は見られぬが、知らず識らずのうちに時代の潮流に沿い、二一頁上段の友竹と土御門泰重の聯句（15と16）と同様に、中世歌風の詩を吟じたものと思われる。

剛外令柔

剛外令柔（?～一六二七）は『五鳳集』跋文を製し、廿四首入集していることは以心崇伝と同じ条件であるが、幕政には殆んど参与せず、その反面、仙洞御所・禁中の詩聯句会に出席することが多く、『五鳳集』第十九巻を謄写しているので[15]、以心崇伝よりも剛外の方が『五鳳集』を撰んだ可能性は強い。彼が東福寺に入院した時、雲裔聖興は「住東福同門疏」に、

詩用家法　貽西湖林氏孫

と書き、怡伯令悦は「住東福山門疏」に、

愛西湖梅哦一聯句　挙北岳月駈九州声

と製作した。これは剛外令柔が林浄因の子孫と言われていたからである。林浄因は、宋の詩人で梅妻鶴子と呼ばれた林逋の子孫である。

林逋……林浄因――林宗二[16]……剛外令柔

林浄因は、在元四十五年に及んだ龍山徳見（一二八四～一三五八）が帰国の時に随従して来朝し、生計の為に日本で饅頭屋をはじめ、子孫には剛外和尚の他に、文林寿郁・悦岩東念・梅仙東逋・利峰東鋭らの禅僧がいる。奈良出身の剛外令柔は別称を孤山と称していた。孤山は杭州西湖の中の山で、林逋（字は和靖）が隠棲した所である。法系は、

虎関師錬――龍泉令淬……（五代略）……汝源令見――剛外令柔

である。『鹿苑日録』に

五岳詩聯之会如恒。題鳳凰集京師（中略）恵日剛外去秋在国于西州也〈文祿三・正・廿五〉。

舜岳茶話曰、「於恵日不二庵請剛外西庵。自薩州帰而言句」〈慶長十四・九・晦〉。

とあるので、たびたび薩摩に下向していたらしく、又、慶長七年二月十九日の『鹿苑日録』は、彼が既に京の万寿寺に住していた事を示す。慶長十四年八月廿八日東福寺公帖を受け、寛永二年五月一日南禅寺入院、同四年八月七日示寂した。棠陰玄召の偈は、

提起龍泉三千尺　生機活法没商量　還郷一曲東山月　鉄做心肝誰不傷

であった。

剛外令柔の文学活動は、豊臣秀次奨励の五山月次聯句会から顕著になる。即ち『鹿苑日録』裏文書に、文祿二年正月五日付の民法（民部卿法印の前田玄以）「月次聯句出座衆」があるが、その中に柔首座の名が廿六人の一人として記されている。また、

五岳聯会如恒。辞退衆（中略）剛外（文祿二・十二・廿五）。

五岳詩聯会（中略）恵日剛外自去秋在国于西州也〈文祿三・正・廿五〉。

詩聯会如恒。辞退衆（中略）恵日柔首座也〈文祿三・二・廿五〉。

九州に下った時は欠席したが、若輩衆ながら五山月次聯句会の常連であり、東堂となってからは、後陽成上皇の鳳城聯句会、後水尾天皇の禁中聯句会、近衛信尋邸詩歌会に屢々出席している。

筆者はさきに、剛外和尚の作品が廿四首『五鳳集』に入集している事を紹介したが、その総ては、「読東坡上元試飲詩」（巻一）「春夜歩月」（巻二）「鳥声惜春」（巻三）など題詩で、述懐や応酬詩は一首もない。同じ題で常に十四、五人の五山僧の作品が列記されているので、[17] 五山月次聯句詩会の作品が大部分であろう。巻二の「春夜歩月」の題の下には〝於南昌院〟、巻三の「黄鸝語太平」の下には〝文祿二巳正月廿五日、秀次公始五岳詩聯句於南昌院〟、巻十四の「又（月夜聴鵑）」の下には、〝五月廿五日於南昌院〟と細字で記しているのが、前述の推論の根拠である。ここで筆者は、本稿のはじめに述べた『五鳳集』成立事情の仮説に、もう一言付加したいのである。すなわち、後陽成天皇の五山詩勅撰の御意図は、豊臣秀次の影響も多少は受けておられるのであろう――と。

又もや制限紙数となった。『五鳳集』の内容については次号に譲らざるを得ない。

（未完）

注

（1）『慶長日件録』〈慶長七・二・二〉の禁中聯句会でも、後陽成天皇は第五句で〝砧幽夢不驚〟と作られ、『五鳳集』巻二十には「月夜聞砧」「里擣衣」「聞擣衣」などの作があり、「砧声報秋」と題して、有節、集雲ら十人の五山僧の七言絶句が収められ、当時よく詠まれた詩

材である。

(2) 当時、公家衆では囲碁が盛んであった。『慶長日件録』〈慶長八・四・十五〉などは、その状況を詳細に記述している。

(3) 白楽天「春題華陽観」に〝空留仙洞号華陽〟とあるに拠る。陽は後陽成上皇を連想させる。訳文は筆者のもの。

(4) 土御門泰重はこの日、「講師予に是非とも所望候故、よみあげ仕り候。当座の短策ばかりなり。詩をよむ人無かりし故、無理に所望に逢い申し候」と講師をつとめている。なお当日の詩人に町人亡羊（三宅寄斎）とその徒弟が参加しているのが注目される。三宅寄斎は『中院通村日記』〈元和二・三・晦〉によると、近衛邸和漢聯句会で、泰重が入韻を作る予定だったが、所労により欠席したので、三十七歳の彼が代りに招かれている。元和三・十・廿六も近衛信尋邸詩歌会に出席〈『鹿苑日録』〉。三宅亡羊は泉州堺の人で、藤原惺窩とも親交があり、後陽成・後水尾の内旨により、便殿で経を講じたという。

(5) 当日の『泰重記』に「終日振舞い（ご馳走）あり。申刻雨降る。予清涼殿の御掃除失念、迷惑申し候」とあり、自分の務めの清涼殿掃除を忘れている。まじめな宮廷人ではなかったか？

(6) この日の昼、土御門泰重は禁中からも召され、一条邸から参内出来ぬことを申したが納れられず、やむなく参内して五山僧の有節瑞保らと面八句を詠んで、再び引返して一条邸に参上した。

(7) 今谷明『言継卿記―公家社会と町衆文化の接点―』三一四頁以下。

(8) 文禄二・七・十五の『鹿苑日録』には「赴鹿苑祝聖（中略）。此外大衆一人無之。吾山之凋落可嘆々々天哉々々」とあり、文学のみならず、禅林の重要な儀式の祝聖に衆僧は参加せず、寺院の役僧だけの形骸的な法儀となり、当事者の僧録すら「天なるかな」と嘆いている。

(9) 『東福寺誌』七八一頁参照。

(10) しかし豊臣秀次は聚楽城に出頭した有節瑞保に、「去冬、月次聯句の人衆書立分は悉く出座せしむべしと雖も、若輩衆が諸老の力を借りて章句対句仕るべくんば、甚だ然るべからず。所詮自己の胸襟より句を流出する徒こそ聯句席に出頭せしむべし」〈『鹿苑日録』文禄二・正・四〉と命じて五山月次聯句会の質的向上に意欲を示す。

(11) 拙著『五山詩史の研究』一〇頁、及び本論集第四巻九頁参照。

(12) 剛外令柔の『五鳳集』跋に「日東の上皇、聡明文思（中略）一朝、百僚をして、古来五岳諸彦、虎関・乾峰・空華・蕉堅・惟肖・村庵・江西・瑞岩以下今日に洎ぶ詩を輯録せしむ。以て六十四巻と為す（中略）聖徳今や凡鳥に及び万人遐かに仰ぐ。未載の山林風月集は三冊、始めて五岳の外に又他山の佳作有るを知る。集大成して六十七巻と為す也」。とある。「五岳の外」といっても、大徳寺派の一休宗純と、妙心寺派の鉄山宗鈍の二人だけである。『山林風月集』は稿を改めて紹介し考察してみたい。

(13) 辻善之助『日本仏教史之研究』続編など。

(14) 『鹿苑日録』〈文禄三・五・廿五〉に、「廿五日。聯会辞退衆惟杏、月渓、惟舟也」とあるのが、この月次会の記録であろう。

(15) 『五鳳集』巻十九の巻末に「辱くも綸命を奉じ、老眼を摩挲し、古来の五岳諸彦の詩選一冊子を謄さしむ。攸愧字々野書濫真なり。元和第八龍集壬戌蜡月中浣（十二月中旬）恵嶠（東福寺）比丘剛外客令柔謹書判」とある。そしてこの巻十九には「秋日海棠」と題する彼自身の作もある。

(16) 林宗二（一四九八～一五八一）は牡丹花肖相より『古今集』の奈良伝授を受け、『源氏物語林逸抄』などの著がある。

(17) 剛外令柔と同じ題で作詩している五山僧は古澗慈稽23、梅心正悟23、月渓聖澄23、集雲守藤22、梅印元冲20、三章令彰20、有節瑞保19、

以心崇伝18、清叔寿泉18、惟杏永哲15、玄圃霊三14、英甫永雄12西笑承兌11、熙春龍喜9、梅谷元保4の十五人である。数字は作品数で、ばらつきがあるのは欠席した為である。